



TITLE:

日食観測前奏曲:横濱出發まで

AUTHOR(S):

柴田, 淑次

---

CITATION:

柴田, 淑次. 日食観測前奏曲: 横濱出發まで. 天界 1934, 14(154): 131-132

ISSUE DATE:

1934-01-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/165481>

RIGHT:

## 日食觀測前奏曲

柴田淑次

### 横濱出發まで

本年2月14日、我國委任統治領の皆既日蝕觀測のため、小生も末席を汚して南洋迄行く事になつた。昨年9月、觀測隊のメンバーが定まつてより、今日横濱出發迄5ヶ月弱、我々は其準備に忙殺された。メンバーは最初上田教授を始め、竹田、上島、渡邊、森川、千田、上谷、平井の諸氏と金工の木下氏と小生の計十名であつたが、其後、竹田上島兩氏は病氣のため参加不可能となり、代りに、荒木助教授と、大工が一名加はる事になつた。我々觀測隊の任事は、アインシュタイン努果の検討を主とし、他に Flash と Corona spectrum を撮影する筈である。アインシュタイン効果係りは、上田教授を主として渡邊、森川兩氏の擔當である。此れには焦點距離の長いレンズが入用なので、昨年8月ドイツのアスカニヤ會社に注文した。口径14センチ、焦點距離5米と云ふべら棒に f の大きいものである。注文が遅かつたので、一時はレンズが出發の間に合ふか、心配したが、幸ひにも年末12月28日、神戸に到着した。アインシュタイン・カメラは此の如き長焦點のもの故、初めはシーロスタトを用ひて水平式にする筈であつたが、後に計畫を變更し、西村製作所に其のマウンティングを注文して、英國型の赤道儀式となつた。年末に總べてが完成したので、大學の構内に假据付を行ひ、2—3のテストを試みた。乾板は 30cm 平方のものをを用ひる。30cm 平方の乾板一枚幾圓といふのであるが、併し大砲の一發よりも遙かに經濟的で、何と云つても科學の戰爭は所謂「戰爭」より安い。アインシュタイン・カメラのテストのため上田教授以下、年末年始にかけて、徹宵々々、正月もヘチマもない有様であつた。Flash と Corona spectrum は小生の擔當に屬するが、此の方面はマコトに貧弱で、輕フリント・プリズム一個と、10センチレンズを一個使用するのみに止まる。乾板は八ツ切二枚を同時に取枠に入れて、ラツク・ビニヨンによつて、乾板を送り出し數個のスペクトルを撮るのである。波長の範圍は、5300Å より 3600Å 迄、最初の計畫はプリズム3個による Corona Spectrum であつたが、プリズムが得られなかつたので、止むなく

Flash に模様變へをした。併し此の装置でも Corona spectrum が撮れるだらうと思ふので、尙又、皆既日食時にポカンと空を眺めて居るのも罰當りだから、トモカク Corona に爆寫する事にした。貧弱な装置とは云へ、之れにも200圓近くかゝつた。経緯度の決定其他の仕事は皆夫々の分擔に屬し、何れ此の次ぎに記す事にする。南洋の一孤島に出かけるのであるから、ニューヨークやベルリンに行くのと違つて、食料品、寢具、藥品、サイダル、ビール、菓子、煙草に至る迄携帯しなければならず、其の荷物は大変なものである。丸4日間日夜をそく迄荷作りをやつて、漸く去る10日の午前3時半に總べての荷物が出來上り、今日午前8時より、馬車3臺に滿載して、京都の貨物驛に運び、午後3時漸やく、發送を終つた。

11日の夜は、花山天文臺と東亞天文協會の盛大な送別宴を受け、愈々12日夜出發隊として、上田、渡邊、千田諸氏と小生が京都驛を出發する事となつた。列車は午後8時10分京都發、東京行、寒夜にも拘らず理學部長、山本夫人、を始め、花山や教室の各員及び理學部關係の方々が見送られた。

13日早朝、横須賀着。直ちに運送店に行つて、荷物の積込みを依頼した。軍艦「春日」は、艦内を見た所によると、豫期に返し、可なりキレイで堂々として居る。此處で副艦長秋吉中佐、東京天文臺の福見助教や服部氏に會つた。軍艦はユレルらしく、上甲板が波に洗はれるため、荷物は一番高い所と、中甲板に分割した。東京天文臺の荷物は京都の二倍以上あり、總數200個弱と聞いた。京都天文部の荷物は、13日、快晴に恵まれて、夕方迄に無事積載し、愈々15日横濱出港を待つのみとなつた。

尙、外國側は、初めロシア、フランス、も參加する筈であつたが、病氣等のため、結局アメリカのみ來る事となつた。

後發隊は14日夜より15日朝にかけて横濱は到着し、全員揃つて、15日午後3時、本土を後にして一路南洋に向ふのである。(1934年1月15日 東京にて)

